

水石文化を世界遺産に

藤岡愛石会会長 西山 巍

2014/7 「愛石」

風薫る季節から初夏へ、各地で石展や採石イベントが盛んにおこなわれる頃となりました。当会も、5月初めの2日間、恒例の展示会を盛会裏に開催することが出来ました。残念ながら、新任会長の私とは言えば、病氣療養のため入院、当日は会場に向くことが出来ず、会員の皆さんに大いに迷惑をおかけした次第です。

全国には四百もの愛石団体があると伺っております。最近では「月刊愛石」の誌面に米国のグループの活動が紹介されるようになりました。国内外でそれぞれが「石」を極めるべく日々精進されていることは、誠に喜ばしい限りであります。しかしながら、一方で各団体ともに会員の高齢化や会員数減少に悩まされているのではないのでしょうか。少人数での会の運営が難しく、閉会を余儀なくさせられたり、近隣のグループ間での催しもの共同開催も行われているやに伺っております。幸いにも当会は会員数25人の中規模ながら、これまで良き指導者を得て、アクティブに活動を展開しております。

私も、昭和40年すぎの全国的石ブームの中でこの趣味を始め、早や半世紀近くになつてしまいました。当会にも当時からの友人が多く、昔話をしながら採石会や研究会を楽しんでおります。まあ、これはこれで結構なことですが、各地の愛石団体が直面している会員高齢化の現実、かなり深刻度を増しているのではないのでしょうか。

65歳以上の人口が21%を越すと、超高齢社会と言われるそうです。日本は昨年の人口統計で23%、団塊の世代と呼ばれる皆さんがこの年齢ゾーンに加わりつつあり、まさに日本は世界一の老人国となつてしまつたのです。各国が日本の動向を注視し、自国の高齢化に備えようとしています。政治、経済、福祉、年金等、どういふ制度設計をするか、こんな難しいお話は、政治家にお任せするとして、さて我々の水石界は今後どうなるのでしょうか。今後どうすべきなのでしょう。

水石趣味を「趣味」として語る限り、個人が生活をエンジョイする糧の一つでありましょう。それに傾注する強さ、深さは個人の

ペースに委ねれば良しとすべきかと思えます。会社生活を終え、さあこれから楽しい「余生」をと始めるには、「石」は最高だと思えます。全国四百の愛石団体は、こうした趣味の受け皿となつて、高齢者にも機会を提供する役割を担っていることは当然であります。

一方、水石趣味を「文化」と捉え、連綿と続く伝統を継承し、次世代へ伝承する大きな義務を負つて、全国各地で現場活動を行っている事はさらに重要なことでもあります。水石文化に関しては、「水石は自然芸術趣味の極致、日本の美意識の真髄であり、無限の世界を感じる深遠な伝統的行為である」と日本水石協会のホームページで高らかに謳いあげられています。日本水石協会、全日本愛石協会、日本石道学会、国際鑑賞石協会ほか日本の水石界をリードする組織と先達の方々が「愛石」や「樹石」誌を通じて、さまざまな発信をし、伝統文化の伝道師の役割を担っていたに、敬意を表したいと思います。

文化は伝承されなければなりません。さらなる組織強化と後継者の育成が肝要であります。正直、「石」は世間から見ればまだまだマイナーな分野での文化活動です。もともと認知度を高めなければならないと思つた次第です。

折しも、昨年、「和食」が世界無形文化遺産に登録されました。現場の板前さんや料理店の大将や女将さん連の矜持をくすぐり、誇

り高く和食文化を守り抜く決意が強まったのではないかと推察します。

話は変わりますが、白川郷が世界文化遺産に登録されたのが1995年です。登録に尽力された白川村の谷口村長（当時）にお話を伺う機会がありました。過疎が進む中、数少ない村内の若者を集めては、郷土に誇りを持って、と何度言っても効果はなく困っていたが、ひとたび世界遺産と認定されてからは、言わずとも故郷を愛する気持ちが高まり、村の活性化が図られたということでありました。行政として分かりやすく「仕掛け」をすることの重要性を熱く語っていただいたことを思い出します。

水石趣味は奥深く、素晴らしい伝統文化であることを世界に知らしめるために、世界無形文化遺産登録に向かって活動をしてみては

いかがでしょうか。この仕掛けが成功すれば、まさに水石文化のルネサンスが訪れることでしょうか。中央と地方が一体となって盛り上がるでしょう。後継者問題も解消するでしょう。老若男女の関心も高まるでしょう。国際化も促進されるでしょう。

世界遺産登録の最重要ポイントは「顕著な普遍的文化価値」の有無であると言われています。水石の文化価値は、まさに顕著で普遍的であることに疑いありません。

また、老婆心ながら、登録対象は少し広い範疇でいいかとも思います。盆栽、盆石、石庭を含めた「自然の縮景芸術・文化」という捉え方がいいかもしれません。中央からのお声かけで我々地方の愛石団体が役割を持って登録準備を分担させていただければと願っております。





藤岡愛石会石展（2015年5月2日～3日）の会場となっているつどいの丘に集合した藤岡愛石会の会員

「水石文化を世界遺産に」 提案その後・趣味と文化

藤岡愛石会会長 西山 巍

昨年7月、「水石文化を世界遺産に」というタイトルで「愛石」誌に寄稿いたしました。水石界の活性化のための仕組みづくりの提案です。高齢化による活動の停滞は誰もが認める現状です。老若男女がもっと石を楽しむためには、この「文化」を後継者へ継承するにはどうすればよいかとの問題意識からの出発でした。

少しは石友からの反応があるかと、期待していましたが、何も聞こえては来ませんでした。

さてさて、全国の仲間の理解を得るために、これからどう進めるか、ひと工夫もふた工夫もと「考え中」です。

わが藤岡愛石会の石展を今年も5月初めの二日間開催し、盛会に終えることが出来

ました。まだまだ一流石展レベルには程遠い内容ですが、会員一同の努力を結集した展示でした。その会場の一角に、世界遺産活動のPRコーナーを設け、ちょっとした説明資料も用意しました。関心度を測ってみたいと思っただけです。期間中の来場者は300人を超えました。そのうち60人の方々が世界遺産活動支援の「署名」をいただきました。

	水石	

**水石文化を
世界遺産に**

皆さんのご理解と協力のもと、
無形文化遺産への登録を目指したいと
考えます。

石の上にも、あと5年。
2020年までの登録を。

石展会場に飾ったポスター

2015/7 「愛石」

唐突なお願いにも拘わらず、2割の皆さんがこのテーマに関心を示していただいたことを確認できました。大成果でした。

ユネスコの世界遺産事業は三分野で行われています。①「世界遺産」、②「無形文化遺産」、③「世界の記憶」です。

いずれも、消滅させてはならない自然や文化や建造物等を「人類の遺産」として保存しようとする素晴らし取り組みです。

最近話題の「明治日本の産業革命遺産」や、昨年の「富岡製糸場」は、①の「世界遺産」対象です。世界で779件・うち日本では18件が登録されています。

一方、②の「無形文化遺産」は、世界で299件・うち日本で22件が登録されています。「和食」や「和紙」はこの区分に入ります。「たぐいしない価値」をもつ伝統的な文化や技能の保存を目指す分野です。来年には、高山や全国各地の「山・鉾・山車」が日本政府からユネスコに提案されることが決まっています。

因みに、③の「世界の記憶」は「記憶遺産」と言われ、危機に瀕した書物や文書がその対象になっています。世界全体で299・日本に3件です。

これらの三事業対象を「世界遺産」と称しています。「水石文化」は、②の「無形文化遺産」への登録を目指そうとするものです。

実感されますように、「世界遺産」の「冠」バリエーションはたいそうなものです。登録後はその物件や文化が「炎上」し、露出度が急騰するのを目の当たりにします。世界が認める財産や、世界に誇りうる文化が身近に存在していたのだという再発見の驚きに関心度を高めているものと思います。

さて「水石文化」は有資格でしょうか。勿論、「是」でしょう。

我々が求める石は、その形、質感、色合い、肌合いが吟味されるだけでなく、「神秘性、自然性、閑寂性に加え神格が備わってなければならぬ」と佐藤観石氏が述べておられます。遠く奈良・平安にさかのぼる数々の「伝承石」はその典型なのでしょう。時々の権力者の手に渡りながらも現代に伝えられている事実は、石の魅力と文化度の高さの証しではないでしょうか。

石は、探石、養石、飾り付け、台座、水盤等、それを愛しむ過程を経て、さらに芸術性が高まります。こうした石を取り巻く様々な作法・技法が、宗教や学問と影響し合いながら継承されてきました。

石の良否と、伝統に裏付けられた作法・技法とを律する普遍的な「規範」が、「たぐいしない価値」を有する「水石文化」であると思っています。無形文化遺産認定のハードルは高いものですが、有識者と経験豊かな愛石家の皆さんのお知恵で、この文化を再認識し、世界

に知らしめることが出来るものと確信しています。

新しい「冠」を得て、全国の愛石グループが誇り高く、文化を実践し、趣味を楽しむ。こんな出来上がりの姿を描きながら「世界遺産」候補に手を挙げる事が出来ればと願っています。

当藤岡愛石会の石展開催期間中に、このテーマに関し愛石家の皆さまから貴重なコメントがありました。積極的に賛同いただいたご意見には、背中を押されて力強い励みになりましたし、否定的なお考えに対しては、さらなる理解活動の必要性を痛感し、これまた新たな励みになりました。

最近、近隣数か所の石展を見学する機会がありました。しっかりと飾り付けられた会場で厳しく選別された石を拝見し、身が引き締まる思いをいたしました。我がグループももつと頑張らねばという気持ちが強くなりました。嗜好やレベルには差がありますが、全国各地の愛石グループがそれぞれに「文化」の実践活動を行っているわけで、いずれにも甲乙つけずに賛辞を贈らねばなりません。個人やグループの「文化」への到達目標が高ければ高いほど、これだけなければとの気持ちが強くなり、ついつい排他的になり、批判的になることがあります。これは避けねばなりません。価値観や審美眼に個人差があるから、趣味は楽しいものなのです。わがグループ

も、一般人に対する石文化の伝道活動にはそれなりに貢献しているものと自負しながら、さらなる研鑽を続けたいと思っています。

昨年、私は長期入院を余儀なくされ、半年の闘病と、その後の半年はリハビリで過ごしました。今年になってようやく体力も回復に向かい、石を楽しむことが出来るようになりました。病床では何度か「河原へ行ってみないな」と、元気な石友をうらやましく思い、一日も早い健康回復を願ったものでした。青空の下、流れの音を聞きながらのおにぎりのうまさ、いまだに遭遇しない良石さがし。探石に始まるこの趣味は、何とも快感至極です。

しかし、趣味は属人的である限り、消滅します。現に私の蔵石などは常に邪魔者扱い、最近に至って子供達からは、私亡きあとの石の始末をどうするのかと詰問され、ええい「ヤフーにでもだせば、お布施くらいにはなるだろう」と言い放つ始末です。皆さんはいかがですか。

石趣味を絶やさず、日本の伝統文化として伝承する強い仕組みの一つに「無形文化遺産」があると思いい、この提案をさせていただいております。

水石界のリーダーの方々も文化の継承者不足を憂い、警鐘を鳴らしています。

全日本愛石協会の渡辺浩氣氏は、写真集送付時のカバーレターで現状を次のように述べられています。「愛石人口の減少のなか、協

会として水石文化の継承と愛石趣味家の底辺拡大に尽力するも、道半ば。貴重な文化遺産を後世に引き継ぐ方策を急がねば」と。

また荒木英弑氏は愛石誌面で、「石だけでなく、水盤、台座、卓などの水石用具をいくつかし、敬い、次世代に引き継ぐ心が茶道などに比べ欠如している」と。

先達の皆さんの危機意識は、かなり強いものであることが理解できます。

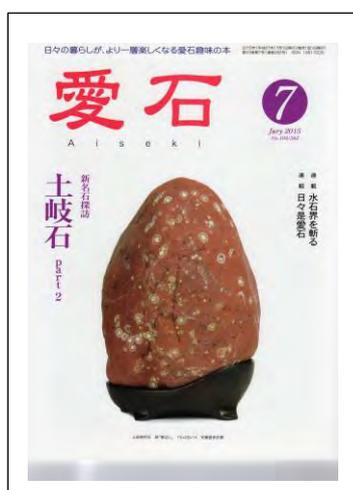
私は昭和17年午年生まれです。先達の皆さま

んよりは若いかもしれませんが、干支がもう一回りするまでアクティブでいる自信はありません。リニア乗車は無理、せめて二度目の東京オリンピックはこの目で楽しみ、無形文化遺産登録を果たした水石文化のルネサンスに立ち会いたいと願っています。

全国の石友には、このプロジェクトへのご賛同を切にお願いいたします。

熟年パワーを「炎上」させてみませんか。

(2015年6月)



めげずに・やりぬく「世界遺産」登録プロジェクト



福光友石会と藤岡愛石会の面々による探石記念撮影。「水石文化を世界遺産に」の看板を持って楽しげ。

合同探石会での儀式

藤岡愛石会会長 西山 巍

6月21日の日曜日、当会の探石会の実施日でした。

今回は富山県の福光友石会の皆さんと小矢部川での合同イベントでした。前夜来の雨が夜明けからひどくなってきましたが、早朝5時半に集合し、200^キ先の目的地を目指し豊田市の郊外を出発いたしました。車4台に分乗して後期・前期高齢者15人が参加。私が乗車した車、申し訳なく思いながらも車中最高齢83歳のベテランがハンドルを握ってくれました。途中の雨脚は決して収まりを見せず、はらはらドキドキ。東海北陸道の郡上八幡あたりで、ようやく天候が小雨へと移り始めました。いつものことながら、いずれの季節も、このあたりで雲行きが変化するような気がします。

往路は長い登り坂の高速道路ですが、はやる気持ちで運転者の皆さんの右足に伝わり、アクセルに力が入ったようです。予定の到着時間より30分以上も早く、途中集合のサービステリアに到着しました。先方の高道会長さん

んに電話を入れ、集合場所の確認をして再出発。すぐに分水嶺地点を通過、ここから日本海側へは下り坂で車のエンジン音も快調、長い飛騨トンネルを抜けてからは、「なんと」明るい空が迎えてくれました。そういえば今日は「南砺」へ行くのだったのだ。こんな独り言のオヤジギャグに負けずと、車のナビからも「300^{メートル}先、交差点を右折」とか「5^{キロ}以上道なりです」とか。「高速道路を右折するのさ」と思いきや、5年もナビのソフトを交換していない、とドライバー氏の説明で納得。弥次喜多道中も1時間余りで目的地の河原に到着いたしました。

福光友石会の皆さんがお越しになるまでの小一時間、当方会員が中瀬に散りました。折しも、当日は地元の方々が総出で草刈りをしていました。他県ナンバーの車が堂々と作業中の皆さまの間を通り抜けたので、何事かと思ったのでしょうか。遠くから様子をうかがう人や、近くにきて何か調査をしているのかとの質問も出る始末でした。それにしても

2015/8「愛石」

読むことが困難な「荊波橋」(うばらばし)の袂で先方の4人の皆さまと無事合流するところが出来ました。そういえばわが三河地方にも挙母(こるも)、猿投(さなげ)、足助(あすけ)、福谷(うきがい)とか、難しい地名がありますね。

集合場所から小矢部川上流の2か所を親切にご案内いただきました。この時期雨が少なく、河原が変化しないということでした。緑豊かな山並みを眺めながらのおにぎりランチは美味でした。

「愛石」2月号の「新名石探訪・小矢部川石」に触発され今回の探石行となりましたが、誌面で紹介された本紅石や木枯らし石にはお目にかかることが出来ませんでした。しかし参加者はそれなりの成果を得て河原を後にし、その後、会長さんのお店「高道万石堂」での「探石」を終えて帰路に着いたのが14時過ぎでした。急に雨が降ってきました。5人のメンバーは地元の温泉で宿泊し、二日目も高道会長のご案内に甘え、山田川での探石を満喫いたしました。

万石堂さんではご家族総出の歓迎を受け、恐縮いたしました。ご接待いただいた鱒ずし、かぶら漬、本当においしくいただきました。お気遣い有難うございました。持つべきは「石友」です。

今回、私は1石も持ち帰ることが出来ませんでした。高道会長自作の「福光征盔」を譲り受け、探石会の成果としました。久しぶ

りの川歩きで、帰宅後右足の「こむら返り」に苦しみながら、その盃で冷酒を楽しみました。透き通る笹の色合いと、指に伝わる酒の冷たさが何とも心地よいものです。

さて本題です。くだんの「世界遺産」です。私は「水」「石」「文化」「世」「界」「遺」「産」の九枚の看板を車のトランクに入れ、持ち歩いています。拡大コピーしたA3紙を、ベニヤ板に貼り付けた自作品です。いつでも、どこでも機会があれば、このプロジェクトの露出度を高めるべく写真撮影に使用するためです。「愛石」7月号に掲載いただいたそのための写真には強いインパクトを感じました。よし今後もこれで行こう

と、小矢部川でも撮影「儀式」を行いました。福光、藤岡両グループの皆さんのお顔も楽しげです。

今、私の手元には新しい2枚の看板がその出番を待っています。「盆」と「栽」です。水石界と盆栽界が歩調を合わせて無形文化遺産登録を目指すことが出来れば、この上もありません。石と盆栽の愛好家達が集合し、11枚の看板を持つて記念撮影をする日が近づいているものと期待しています。

緒についたばかりのプロジェクトです。めげずに、白けずに、本気でやり抜かなければなりません。全国の皆さまのご支援をお願いいたします。

「水石文化を世界遺産に」!



水石文化の世界遺産（無形文化遺産）登録

署名活動への積極参加を

全日本愛石協会 西山 巍

共同プロジェクトと署名活動の推進

一般社団法人全日本愛石協会の7月の総会で、「水石文化の世界遺産（無形文化遺産）登録」を事業計画に取り上げることと決定しました。前後して日本水石協会との協議も始まり、水石界の両組織が共同でこのプロジェクトを進めることとなりました。

まだ緒に就いたばかりの事業ではありますが、この後は全国の石友のご賛同を得て、力強い活動に仕上げるべく諸活動を企画してまいります。

まずは、今回の「署名活動」へのご参加をお願いしたいと思います。

このプロジェクトに真剣に取り組む積極姿勢を示さなければなりません。水石界の力の強さと大きさを「見える化」するに絶好の機会かと考えています。各地の愛石家の皆さんと、一人でも多くの友人、知人のご協力です。「当面の目標」10,000人を早期に達成し

たいと希望しております。

世界遺産登録の意義

日本社会の高齢化は様々な分野に影響を及ぼしております。我が水石界も例外ではありません。全国の愛石団体で、会員の減少や後継者不足が現実の問題となつてまいりました。日本古来の貴重な伝統文化を、未来に引き継ぐことができるのでしょうか。

ユネスコの世界遺産事業は、まさに、こうした消滅の危機にある有形無形の文化を保存し、伝承する仕組みなのです。水石文化を絶やしてはなりません。世界遺産（無形文化遺産）への登録を目指す意義は大きいものなのです。

登録を果たすことは簡単な事ではないと思えますが、日本の良き文化が世界から認知され、水石界の更なる活性化や国際化が促進されればと願うばかりです。

今後の展開

まずは盆栽界との協調です。日本盆栽協会との話も進んでおり、近々、世界遺産登録事業推進の機関決定もなされるものと承知しています。本件に関しては、以前からいくつかの盆栽組織で議論されました。

ともかくも、盆栽界・水石界が一致団結し、このプロジェクトに取り組むことが必要と思います。文化の共通性と不可分性は衆知の通りです。また、古く文化の発祥をたどれば、中国、台湾、韓国ほかの関係組織との国際協調下で、この取り組みを推進する必要があるかもしれません。

活動組織としてのNPO設立

「盆栽・水石を世界遺産に」との目的で、活動母体としての非営利活動法人（NPO）の設立を準備中です。関係する諸団体が一つの目的に向かって活動する組織です。この組織の立ち上げや、立ち上げ後の活動には、かなりの労力が必要になります。事業の具体的計画はこれからの仕事ですが、皆さまの中からのボランティア支援のお申し出をお待ちしております。

目的実現までに、おそらくは10年程の時間を要する仕事になるものと覚悟しています。元氣な熟年パワーを発揮し、文化保存の大仕事を成し遂げようではありませんか。

2015/10「愛石」

水石文化の世界遺産（無形文化遺産）登録

当面の目標1万人 署名のお願い

月刊「愛石」編集長 立畑健児

一般社団法人全日本愛石協会では、7月の総会決定に基づき、水石文化をユネスコの世界無形文化遺産に登録するための署名活動を始めています。

この運動は、全日本愛石協会、日本水石協会及び日本盆栽協会やその他の関係諸団体・個人に呼びかけ、業界が一致団結して推進しようとするものです。

運動はまだ始まったばかりですが、すでに署名は約2500名集まっています。しかし

まだ当面の目標数である1万人には遠くありません。

本誌読者の皆様のご協力で、68頁の署名用紙をコピー（コンビニ等でできます）して、家族、友人、知人に呼びかけて署名を集めていただき、月刊「愛石」編集部まで送って下さいませよう、お願い申し上げます。（なお「宛名欄」は空白のまままでお願い致します）

（署名用紙は68頁にあります。A4用紙にコピーしてご使用ください）





三重県員弁川で桑名愛石会のご協力をいただき、探石前に記念撮影。この日から「盆」「栽」の2文字が新たに加わった。

水石界と盆栽界の大同団結で

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

藤岡愛石会会長 西山 巍
全日本愛石協会常務理事



2015/12 「愛石」

9月13日は藤岡愛石会の秋期探石会でした。参加者15名、豊田市からは高速道路で約1時間の員弁川（三重県）を目指しました。

現地では桑名愛石会の皆さんのご案内と指導のおかげで、我が会員諸氏もそれなりの成果をあげることが出来ました。河原での数時間の後、「員弁川石の館」（館長・伊藤忠氏）を見学し、帰路につきました。中山会長さんはじめ桑名の皆さまのご厚意に甘えてしまいました。お土産にといただいた十数個の員弁川石は、次回の当会の交換会で会員に届くようにいたします。有難うございました。

盆栽界と手を携えての活動開始

さていつもの儀式、探石前の集合写真の撮影です。河原で全員整列いたしました。お気付きでしょうか、これまでとは違っています。そうです。出番を待っていた「盆」と「栽」のパネルが加わりました。盆栽界と

水石界、手を携えての活動の始まりの記念といたしました。

この9月に、日本盆栽協会では、かねてから懸案の世界遺産登録事業を再始動させることが決定されたとうかがいました。折しも『近代盆栽』11月号に、斎藤晃久氏寄稿の「日本の盆栽文化を世界無形文化遺産に登録する運動」の連載が始まりました。氏の盆栽文化論が格調高く展開されています。盆栽への造詣の深さと博識に敬服いたします。さらには同誌面で、徳尾真砂弘氏が力強い賛同のエールを送っています。盆栽界の絆の強さを実感いたしました。楽しみに次号を待っています。

たまたま9月初旬に倉敷の斎藤晃久氏を訪ねました。日本水石協合理事長・小林國雄氏と『愛石』編集長・立畑健児氏に同行し、世界遺産活動に関するご意見をうかがう目的でした。所蔵の盆栽と水石の名品を拝見した後は斎藤氏ご夫妻にご接待いただき、すっかり

お世話になってしまいました。有難うございました。

氏のご自宅に隣接する展示室の入り口には署名簿が備えられ、活動への賛同を呼び掛けていました。我が水石界においても数カ月前に署名活動を開始し、これまでに約4000人のご支援を得ております（10月末日現在）。今後は盆栽界と共同で、活動を展開せねばと、力が入ります。全国の皆さんのご協力を期待しています。

消滅危惧文化を救うために

地球誕生から6億年後の、今から40億年前に生物が誕生しました。

しかし、それ以来、地球上に出現した種の9割以上が絶滅してしまっただけです。地質年代を画する時期ごとに、原因の違いと程度の差はあれ、多くの生物の絶滅が繰り返されて来ました。現在の地球上の既知生物175万種のうち、最近でも毎年4万種が絶滅していると言われています。

一方、「レッドリスト」に登録されている絶滅危惧種の保護対象はわずかに2万種だけです。保護の対象拡大はもちろん、絶滅の原因究明と絶滅防止の対策が急がれます。生物の多様性を保ち、地球の潤いある環境を維持しなければなりません。

さて「文化」の多様性は維持されるのでしょうか。

ユネスコの無形文化遺産には、世界161カ国で364件（2014年）が登録されています。消滅危惧文化のレッドリストです。

このうち日本の22件は中国の38件に次ぐ世界で2番目に多い登録です。東洋文化の多様性と、関係者の文化保護への感受性の高さの証かと思えます。

これら以外にも、世界各国と日本に根付く文化の中に、存続が危ぶまれるものが数多く存在することでしょう。盆栽・水石文化もその1つです。早期に登録を果たし、組織化された保存活動の仕組みに組み入れなければと願うばかりです。

しかし、文化の保存・伝承の取り組みは、登録達成で済みではありません。なすべき課題はまだたくさんあるものと思えます。

「うなぎ」はなぜ絶滅危惧種になってしまったのでしょうか。その原因と今後の対策は？

同じ質問を「盆栽・水石文化」へ投げかけてみなければなりません。

直面する危機状態は、社会の高齢化や価値観の変化などが複合的に影響しあって表れてきたものでしょう。その間、盆栽・水石界の識者や組織が声高に発してきた警鐘は、あらかも「オオカミが来た」としか受け取られなかったからです。

ともあれ、我々当事者の取り組みが不十分であったことは、真摯に反省しなければなりません。

盆栽と水石の伝統文化は両界で守らねばなればなりません。歴史を共有し、不可分の関係にある両文化ではありますが、微妙な意識の違いや思い入れの差は存在するものと思

います。

両界が真に連携するための統一母体として、設立予定のNPO法人が有効に機能するものと考えます。法人の活動にあたっては、文化保存事業、活性化事業、国際化事業、世界遺産登録事業ほか、幅広い分野の「打ち手」を繰り出すつもりであります。したがって、法人名称は「盆栽・水石文化保存会議」（仮称）的なコンセプトとし、活動の幅を広くしておくことがよろしいかと考えています。無形文化遺産登録はその活動の目玉ではありませんが、最終ゴールではありません。

全国の愛石団体にご協力を呼びかける

先日、名古屋市で石睦会の石展を訪ねました。会長の成田宣和氏は水石文化の衰退を憂い、若い世代へのバトンタッチをと真剣に悩みを吐露されておりました。その折、「世界遺産プロジェクトに協力したいが、何をすればよいか」との問いかけがありました。NPO法人の事業内容に関するご質問かと受け取りました。効果的な「打ち手」は何なのでしょう。周知を集め、具体化を図りたいと思っております。

目下、全国の愛石団体宛に、ご意見をうかがい、ご協力をお願いする書面を準備中です。400団体の皆さん、なにとぞよろしくお願いたします。

全国および世界で活動している盆栽を愛する皆さん、石を愛する皆さん、大同団結し、伝統文化の保存を目指しましょう。めげずにより抜きましょう。

（2015年10月）



2016/4 「愛石」

水石文化の世界的（無形文化遺産）登録運動

日本の伝統的水石文化を 世界の「無形文化遺産」に!!

全日本愛石協会相談役 佐藤観石

一、「無形文化遺産」の登録プロジェクト

月刊『愛石』2014年7月号において、
藤岡愛石会会長 西山巍氏（現・全日本愛石協
会専務理事）が「水石文化を世界遺産に」と

初めて提唱し、その後2015年7月号・10

月号・12月号と引き続き「世界遺産」の登録
プロジェクトを叫び続けてきましたが、最近

これがようやく実を結び始めたようです。

詳しくは、西山氏より報告があると思いま

すが、全日本愛石協会・日本盆栽協会・日本
水石協会等が互いに連携し、盆栽界と水石界
が一丸となって世界無形文化遺産の登録に向
けて発進することになりました。

平成27（2015）年9月3日付の朝日新
聞夕刊に、「無形遺産 和食に続け」「書道も
将棋も俳句も伝統文化次々名乗り」という記
事が掲載されましたが、各業界とも先細りの
現状を打破する起爆剤として、登録も大事だ
が「めざす過程も大事」と次々に名乗りを上
げています。

愛石界の現状も減少傾向にあり、何らかの
対策が必要であることは他の伝統的文化と同
様です。水石文化に活を入れる対策として、
この無形文化遺産の登録計画は正に起爆剤と

して大いに期待することが出来るでしょう。仮に将来この登録申請が通らなかつたとしても、無形文化遺産の登録を目指して全国の愛石家が団結することは、必ず大きな起爆剤として愛石界に活気をもたらすと思います。

二、「無形文化遺産」とは

「世界遺産」は「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(世界遺産条約)に基づいて、ユネスコの世界遺産リストに登録された普遍的価値のある不動産を対象とする遺産です。不動産が対象であるため「無形文化遺産」は世界遺産条約の対象ではありません。そこで無形文化遺産を保護するために2003年「無形文化遺産の保護に関する条約」(無形文化遺産保護条約)が新しく採択されました。

「無形文化遺産」の定義について、同条約には次のとおり規定されています。

第二条 (定義)

1、「無形文化遺産」とは、慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間であつて、社会、集団及び場合によつては個人が自己の文化遺産の一部として認めるものをいう。(以下略)

2、1に定義する「無形文化遺産」は、特に、次の分野において明示される。

(a)、口承による伝統及び表現(無形文化遺産の伝達手段としての言語を含む。)

- (b)、芸能
- (c)、社会的慣習、儀式及び祭礼行事
- (d)、自然及び万物に関する知識及び慣習
- (e)、伝統工芸技術

盆栽水石は、(a)の「口承による伝統及び表現」と(d)の「自然及び万物に関する知識及び慣習」の分野に該当するものとして登録申請をすることになると思います。

最近「無形文化遺産」として登録された「和食」は、懐石や日本料理ではなく、「和食」日本人の伝統的な食文化」として認められています。従つて盆栽水石も「盆栽水石」日本の伝統的な盆栽水石文化」として申請することになるでしょう。

三、登録申請手続

世界遺産条約も無形文化遺産保護条約も国家間の「条約」であるため、条約の提携国が当事者となります。従つて「無形文化遺産」の登録申請は「日本国」がユネスコに対して申請するものであり、民間団体が直接申請することは出来ません。民間団体としては、日本政府に働き掛けて、無形文化遺産の登録手続きをしてくれるように政治的な運動を起こすこととなります。

その準備として、先ず、①登録申請への国民的な支持(アンケートや同意書)を得て日本政府に働き掛けるために、日本中の盆栽家

と愛石家、盆栽団体と愛石団体、盆栽業者と水石業者等が結束する必要があります。そして、②各県の自治体に働き掛けたり、政府や文部科学省・外務省・農林水産省等に対して「無形文化遺産」登録手続きをするように政治的な働き掛けをすることが必要になります。

その結果、③文化庁や農林水産省、外務省や経済産業省、環境省等の関係省庁が動き出して、「有識者による検討会」を立ち上げて、盆栽水石が自然を尊重する日本人の精神を体现した「日本の伝統的な盆栽水石文化」であるかどうかについて検討し、「登録申請書」(案)が作成されます。次に、④文化庁の「文化審議会」等において、「日本の伝統的な盆栽水石文化」の「無形文化遺産」登録申請について徹底的な審議が行われます。

そして最後に、⑤日本政府として推薦を決定し、ユネスコ文化局無形遺産課に対して「申請書」が提出されるのです。この際に同意団体等一覧表や賛同書なども一緒に提出されます。

その後は、ユネスコにおいて補助機関による勧告の公表や政府間委員会における審査と登録決定が行われて「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」(代表一覧表)に登録が行われるのです。

四、協力的体制の必要性

最近、「和食」日本人の伝統的な食文化」

が無形文化遺産に登録されて話題を呼んでいますが、これは和食衰退の危機感を抱いた京都の料理人が最初に動き出したものです。

現在、書道家が結束して日本書道ユネスコ登録推進協議会を創立して活動を始めており、日本きもの連盟や日本将棋連盟、国際俳句交流協会、伝統木造技術文化遺産準備会などが無形文化遺産の登録を目指して動きだしています。

現在推薦件数が多いために、ユネスコの事務局が追い付かず、推薦を1国あたり1件に限定しており、登録件数が少ない国を優先す

るために、中国に次いで多い日本は2年に1度の審査になったとのこと（前記朝日新聞夕刊）。

従って、盆栽水石の世界も、一日も早く協力体制を整えて登録プロジェクト運動を始める必要があります。

もし、登録が不記載となったとしても、盆栽水石世界の将来のために大いにプラスとなることが明らかであるため、日本全国の盆栽家と愛石家、盆栽団体と愛石団体、盆栽業者と水石業者等の絶大な支援と協力を期待する次第です。





2016/4 「愛石」

めげずにやりぬく世界遺産プロジェクト（続報）

「盆栽・水石文化保存会」の発足

藤岡愛石会会長
全日本愛石協会専務理事 西山 巍

新春、1月8日は名古屋市内・吹上ホールでの第86回銘風盆栽展の初日でした。

午前10時開場と同時に、会場は多数の来場者であふれました。盆栽にはずぶの素人の私であります。展示された名品と盆栽愛好家の双方から強い熱気を体感いたしました。この銘風展は国風展に次ぐ長い伝統を持ち、

大観展、作風展、雅風展とともに盆栽界の五大イベントの一つであることも知り、宜なるかなと、その盛会さに納得をした次第です。会場を二回りほどしましたが、私の目はついつい添えとして配されている名石に向いていました。出展品、展示方、いずれも大したものでした。

さて、この日は世界遺産プロジェクトの節目の日となりました。

昨年来の何度かの話し合いや専門誌での意見投稿を通じて、盆栽・水石文化の無形文化遺産登録を推進しようではないかとの機運が高まってまいりました。特に斎藤晃久氏の『近代盆栽』誌での檄文は関係者をうならせました。今回は、鬼頭正男氏（日本盆栽協合理事）のお骨折りで、銘風盆栽展開催に合わせ関係者が名古屋に参集することが叶ったわけがあります。

日本盆栽協会からは福田次郎理事長と理事の鬼頭正男、鈴木亨、今井昭一各氏が、日本水石協会から小林國雄理事長、森前誠二事務局長と加藤崇寿理事、加えて全日本愛石協会の前理事長の渡辺浩氣氏（現顧問）と私の9人が、昼食をはさみプロジェクトに関する意見交換を行いました。出席各氏とも、この活動の重要性と必要性は十分に理解していることを確認しました。盆栽界は来年4月開催予定の「第8回世界盆栽大会 in さいたま」の準備を控え、当面は余力がないという状況認識でありました。

はてさて、どうすべきかとの議論のあと、国内外から数千人の来場者が予想される世界盆栽大会を、むしろ好機と捉え、盆栽・水石文化の保存活動と無形文化遺産登録推進を世界に訴えることにしては、との積極的な総意を得ることが出来ました。

この日の結論は、「盆栽・水石文化保存会」

を立ち上げることの合意でした。

福田次郎氏を会長とする任意団体として発足いたしました。盆栽・水石両界の文化保存活動を横断的に行う組織として、大きく育てなければなりません。今後、全日本小品盆栽協会、日本阜月協会、盆栽作家協会ほか関係する諸団体のリーダーは勿論、全国の諸団体や個人の皆様にも参画をいただき、幅広く事業を展開したいと考えております。

長丁場の取り組みとなります。活動を「見える化」し、「楽しい企画」を「めげずにやりぬく」、これが肝要かと銘じております。多くの皆様からのご支援を期待しております。

以上が「盆栽・水石文化保存会」発足の報告です。



以下、今後の進め方に関しての「私の思い」を述べます。私見です。

危機の認識に関して

ユネスコの「世界遺産」、「無形文化遺産」、「記憶遺産」は、いずれも消滅の危機にある文化を保存するための認知活動と理解します。

無形文化遺産登録を目指す、盆栽・水石文化の危機的状況はいかほどのものなのでしょうか。

私自身の所属する藤岡愛石会を含めた近隣

諸団体の実情から、このままでは衰退は避けられないとの感を強くし、プロジェクトの提言をいたしました。いまひとつ全国レベルの諸事情が把握しきれいていません。課題解決は、現状の確認とデータ分析が発点であります。盆栽界、水石界の実情を理解するに十分な基礎的なデータの収集が急務かと感じております。

月刊『愛石』（3月号）に掲載されている「全国愛石団体名鑑」には、369団体が掲載されています。それぞれの会員数、年齢構成、開催行事、集客数ほかの全国レベルの状況が集約されれば、漠として感じた危機感をもっと現実のものとなると思っております。国が行う「国勢調査」に習えば、盆栽・水石界の「界勢調査」ということででしょうか。大組織をお持ちの日本盆栽協会、全日本小品盆栽協会、日本阜月協会や日本水石協会では、すでに掌握されているかと思えます。それを開示いただき、両界が当面する実態を証したいと考えます。この点の確認を経て、次の手を打たなければなりません。

最近国立がん研究センターから「10年生存率」が公表され、話題になりました。私もかなり低率の部位を患っていますので、関心もひとしおです。従来聞き及んでいた同種の数値が、実は非常に少数母数からの推計値であったことも驚きでありましたが、今回の3万5千を越す症例の解析結果には、相当の迫力があります。見える化の成果です。

盆栽・水石が無形文化遺産を目指すには、対外的に的確に回答できる解析結果が必要になるでしょう。迫力あるものを用意したいものです。

これらは、新しく発足した保存会でなく、既存の組織で実施いただければ効率よく運ぶのではないかと存じますが、いかがなものでしょうか。

守るべき文化に関して

昨年10月、月刊『愛石』の立畑編集長と一緒に大手町の世界遺産アカデミーを訪問し、話を伺うことが出来ました。

その帰路2人で、盆栽・水石文化とは何なのだろうかと話し合いましたが、簡単には結論は出ません。しかし、外部からのこの種の質問には、しっかりと「説明責任」を果たさなければならぬと思えます。

自然共生、縮景、見立て、仕立て、飾りつけ等々、「文化」という言葉を繋げて自然に受け入れられる共通のコンセプトは何か、さらに養石、探石、培養、整姿、作台等々、「文化」のもとして伝承されるべき技法は何か。「守るべき文化」の定義づけに関しては、私の浅薄な知識や経験では到底解決できない無理難題です。全国の皆様のお知恵をお貸しいただき、ご意見をお寄せいただければ大変ありがたいと思えます。

ちなみに無形文化遺産の和食は、「だし文化」と「行事料理文化」がそれであると教え

られました。鯉だしの蕎麦も、土用丑のうなぎも文化であることが理解できました。あらゆる和食を因数分解し、その最大公約数としての「だし」と「行事料理」、非常に分かりやすい切り口ですね。

以上、(危機の認識)と(守るべき文化)についての悩みを吐露してみました。

これら2点の課題をクリアするために、時間をかけてでも納得できるまで「踊り場」をウロウロしてみるつもりです。前のめりにならず、躓きなく次への階段を登ることが出来ればと願っています。

またまた繰り返しになるかもしれませんが、緒に就いたこのプロジェクトは、「盆栽・水石文化を無形文化遺産に」という、高くて遠くて厳しい目標を持った活動であります。分かりやすくチャレンジするに不足ないターゲットであります。さらに世界遺産登録後の盆栽・水石界にもたらされる好影響は、計り知れないほどかなり大きなものになることでしょう。しかし、それで仕事が終わりはありません。世界遺産登録は大きな中間目標ではありませんが、目指すは、「組織的な文化の保存と伝承活動」を定着させ、「趣味界と業界の活性化」を図ることであると考えます。大げさな言い方で恐縮ですが、多くの中高年齢者のQOL(クオリティー・オブ・ライフ)を高めることにも貢献できればと、真に願っております。

これからは、プロジェクト関係者や各地を訪問し、たくさんの皆様からお話を伺いたいと思っておりますし、お呼びがあれば参上いたすつもりです。その折には、ご指導とご支援をお願い申し上げます。

各地で石展が多く開催される季節です。藤岡愛石会石展(4月30日~5月1日)にも是非お運びください。

(2016年2月)



盆栽(真柏)と水石(八溝石・茅舎)の席飾り



藤岡愛石会石展会場横のツツジの前で

月 報

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界(無)
形文化)遺産に登録する
運動を推進しています

(一社)全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長

西山 魏

「ドスコイ！」で盛り上がった石展

風薫る季節、藤岡愛石会の恒例の石展です。近隣の中京水石会様と開催日が重なってしまいましたが、両会ともに盛会でしたのでホッといたしました。郊外の2会場にご来場いただいた皆様、誠に有難うございました。お礼申し上げます。

掲載の写真は、会場設営を終えてから、世界遺産PJアピールのために集合したものです。昨年の同時期同場所には満開のツツジが咲き誇っていました。今年はずでに花の盛りが過ぎ、背景は少々寂し気です。しかし石趣味の方は真つ盛りの元気集団です。ちなみに会員の平均年齢は72歳、最高齢は大平政一さん86歳です(後列左から3人目)。

2日間の石展には、250人にお越しいただき、その7割に当たる179人の皆様から世界遺産活動への賛同署名を頂戴しました。ポスター掲示や署名コーナー設置などの設営はいたしました。会員の署名獲得への「や

る気度」とご来場の皆様の「理解度」がこの成果を生んだものと思います。全国各地の石展、盆栽展会場でも、ひと踏ん張りをお願いいたします。

また、今年は展示席にも、ひと工夫をしてみました。通常の展示に加え、「一生一石」「思い出の石」「カワイイ石」を周囲から観賞できる別コーナーにし、会員自慢の蔵石を展示しました。時々、会場内で若い方々の「カワイイ」が聞こえてきました。

実はもう一つ出し物がありました。昨年に続き、今年も会場内で約30分の尺八演奏会を行いました。琴古流・本間影堂師範の同好会8名の方々に歌謡曲と古曲を披露していただき、好評でした。その後、尺八奏者のお一人の檀雄風師範から、来たる大相撲名古屋場所と石と世界遺産の多幸を唄った相撲甚句が披露されるや、会場全員の「ドスコイ、ドスコイ」の掛け声で大いに盛り上がりました。——ざっと、こんな「石展」でした。

このたびも多くの皆様から力強いエールをいただいた世界遺産プロジェクトです。「賜杯」を手にするまで、めげずにやりぬきたいものです。

(2016年5月 熊本地震に心を痛めながら)

〈署名実績〉6,005人(2016年5月現在)



近代出版での会合。左から山崎 学、徳尾真砂弘、徳尾隆次、鎌田照士の各氏。右端は筆者

月 報

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界（無形文化）遺産に登録する運動を推進しています

（一社）全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長
西山 魏

もっと「見える化」を

JRの高齢者向け3割引きチケットで京都へ向かいました。最近出かけることが多くなった東京と比べ、名古屋からの京都は当然ながら近く、新幹線でほんの40分でした。5月下旬のいい季節です。しばらくぶりの京都でしたが、驚くほど多くなった外国人観光客の落ち着いた散策風景が印象的でした。

今回は近代出版への表敬訪問と世界遺産登録運動に関する支援要請が目的でした。先方からは徳尾真砂弘会長、徳尾隆次社長、鎌田照士編集部顧問、山崎学編集長の4氏、当方は鬼頭正男日本盆栽協会理事、立畑健児月刊「愛石」編集長と私の3人の参加でした。

1時間半の懇談は実り多く終了し、今後、情報交換をしながら連携することを確認しました。盆栽分野の専門メディアの立場から、世界遺産PJにつき国内外への積極的かつ継続的な情報提供を、切にお願い申し上げた次第です。

「お願い」をするからには、当方の活動が分かりやすく展開されなければなりません。全国署名活動と盆栽・水石界の実態調査はすでに各組織に要請して実行中ですが、この1月に発足した「盆栽・水石文化保存会」の活動強化が肝要です。「人・物・金」が備わったNPO法人への改組と、その事業内容の具体化を計らなければとの思いを強め、近代出版を後にしました。

その後、建仁寺へ向かい、開催中の九十九水石同人会の石展を見学させていただきました。何人かの知り合いとお会いでき、皆様の出展席を鑑賞させていただきましたが、その品質感に圧倒されました。国宝「風神雷神」の屏風絵（複製）に、もう一度圧倒されて帰路につきました。

来年は「世界盆栽大会 in さいたま」があります。2020年には東京オリンピック、そして2027年、東京・名古屋間にリニアが登場します。重要なイベントがすぐそこに迫っています。このチャンスを逃さずに、盆栽・水石文化の無形文化遺産登録運動を世界に発信し、国際化し、露出度を上げ、もっともっと活動を「見える化」しなければならぬと思っています。一層のご支援を。



三河臯月会展示会 (2016年5月28日)



作品審査風景



藤岡愛石会、天竜川探石 (2016年6月5日)

全国の「太田君」集まれ!

(二社)全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長
西山巍

三河臯月会の米津春治会長(日本臯月協会理事)からお誘いをいただき、「三河のさつき祭り」を訪問しました。5月末から1週間、岡崎中央総合公園内で開催されました。今年花が早いとご心配の様子でしたが、総

月報

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界(無形文化)遺産に登録する運動を推進しています

理大臣賞ほかの受賞作品の審査過程を興味深く見学しました。

全国署名活動にも積極的に対応いただきました。この1週間前に同所で展示会を開催された岡崎さつき愛好会(織田博会長)の皆様にもお世話になりました。有難うございました。

さて、もう一つうれしい話題です。

東海地方の梅雨入り宣言の翌6月5日は、我が藤岡愛石会の探石会でした。出発時には小雨ながら会員10人と「特別参加1人」が車3台で天竜川、気田川を目指しました。

当日の「特別参加」は、なんと24歳の若者、太田賢吾君です(写真左から2人目)。名古屋の新人サラリーマン氏で、ひよんなことから拙宅の石棚を眺めて興味を持ったようです。今回は彼にとって初めての川原です。ベテラン会員が、孫に話しかけるようにほほえましく初歩からの指導をしております。9月の姉川探石会にはガールフレンドと共に参加してくれるかと楽しみにしています。

思い出すに、私が会社内の「愛石同好会」に入会したのは入社3年目の1968年(昭和43年)26歳の時で、ほぼ彼と同じ年頃でした。当時の石ブームの中、会員数は1000人

を超えておりましたので、会費の集金や、資料作り、探石会のバス手配、人事部との折衝など、雑用係として社内を走り回ったものです。私の石趣味は、その後も進歩なく、永年勤続ならぬ「永年継続」のみで今日に至りましたが、太田君には水石文化を支えるリーダーに育っていただければと、ひそかに願っています。

このところ盆栽園、水石店では世代交代が進み、若手経営者が活躍する場面に出会います。全国にいるであろう「太田君」や若手経営者らが力を結集し、世界遺産PJを推進することが出来ればこの上もありません。趣味人が少々アカデミックに文化保存を標榜し、盆栽水石商の経営者グループが商売拡大を公言しながら、無形文化遺産登録を目指してもよろしいのではないのでしょうか。価値観が多様化する現代で、若者にも受け入れられる文化への変革も必要ではないかと思えます。瞬時に物事が伝達される情報化社会で生き残ることが出来る文化は、どういう姿をしているのでしょうか。

温故知新。変化を楽しみながら底辺拡大への「カイゼン」を重ねたいものです。皆様からのご意見をお待ちしています。

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会
盆栽・水石文化を世界（無
形文化）遺産に登録する
運動を推進しています〕

（二社）全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長
西山 巍

ハツケヨイ！ 世界遺産

大相撲名古屋場所を観戦しました。

14日目に第15代木村庄太郎行司に案内され、館内の行司部屋を訪ねることが出来ました。烏帽子直垂姿で出番を待つ行司さんと、ひと仕事を終えて普段着に着替える方々が入り混じる多忙な雰囲気の一室でしたが、テレビに映る土俵上の厳しい顔つきは見られず、すっかりリラックスした表情でした。長年の修業を積んだ皆さんからは、伝統の国技を支えるにふさわしい、ほとぼしる矜持を感じ取ることが出来ました。ほのかに鬢付け油の香りが漂う別室では春日野部屋床松氏にお会いし、舞台裏の見学を終え、その後は観客席で熱戦を楽しみました。

トルコ相撲が「オイル・レスリングの祭典」として世界無形文化遺産に登録されています（2010年）。全世界292件の中では唯一の格闘技関連の文化です。日本の大相撲は、長い歴史と多数の支援者を有する伝統国技です。近年、力士の国際化も進み、益々

面白くなってきました。老婆心ながら、ユネスコに向かって手を挙げてみてはと思った次第です。

昨年の大相撲6場所の入場者数は77万5千人、リピーターを差し引いても年間約50万人以上のファンが本場所を楽しんでいることになりました。我が盆栽・水石界も国内外のイベントでこれを上回る署名数を獲得したいものです。ちゃっかりと行司さんにもお願いをしてきました。

「発揮揚々・ハツケヨイ！」。頑張りましょう。

盆栽・水石文化の無形文化遺産登録活動には強い組織力が要求されます。長丁場のレースを戦い抜く体力と兵站、即ちフットワークのいい小集団の結成と資金確保が必要です。受け皿としてのNPO設立の本格準備を始める時期かと思えます。設立前の企画業務と設立後の事業運営にご支援いただける同志を募ります。手弁当でのボランティア活動ですが、真剣に文化保存を希求する皆さんからのアイデア提供とご助力を期待しております。

*「正反合」、賢者はいいことを言っています。このプロジェクトを完遂するためには、衆知を集め、切磋琢磨の議論をしなければなりません。注意すべきは「独り相撲」にならぬこと。慎重な仕切りで、力強い立ち合いを目指したいと心しています。全国からのコンタクトをお待ちしています。

（*編集部注）「正反合」とは、ヘーゲルの弁証法における概念の発展の三段階。ある判断（定立）とそれと矛盾する判断（反定立）と、正反二つの判断を統合したより高い判断（総合）のこと。



第15代木村庄太郎行司と（名古屋場所の行司部屋で）

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界（無形文化）遺産に登録する運動を推進しています

（社）全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長

西山 巍

半世紀の変遷を経て、さらなる団結を

7月末から3泊4日の日程で北海道を訪ねました。札幌での全日本愛石協会全国展と総会への出席が主目的でしたが、もう一つ、ひそかな企画^①をしていました。

52年前の1964年（昭和39年）は東京オリンピックで湧きました。その開幕ひと月前の9月に、私は友人2人と共に北海道を周遊しました。大学4年生の元氣盛り、リュックを背負って2週間、ユースホステル泊の貧乏旅行でしたが、実に楽しいものでした。残念ながらこの親友2人はすでに他界してしまいました。最近、終活のアルバム整理で、友と写った函館での1枚を見つけました。これを携え、当時と同じ撮影スポットを訪ねることが今回の旅行のもう一つの目的。ひそかな企画^②でした。特急スーパー北斗で札幌から函館に移動し、翌日レンタカーで目的地を目指しました。あいにくの曇り空で駒ヶ岳は望みませんでしたが、大沼公園の小島の湖畔は昔のままでしたし、函館山からの景観もセンチメンタルな気持ちを起こさせてくれるには十分でした。あの頃は、すでに全国「石ブーム」のさ中、旅の途中訪れた礼文島のホステル「桃岩荘」の岩風呂の縁石が抜き取られて

いたことを思い出します。メノウの原石が持ち去られたと宿のご主人から伺いました。早速、この学生3人、海岸でお宝を探したものでした。もちろん見る目も成果もなし。思えば、これが私の最初の探石体験かもしれせん。

東京オリンピック前後は水石界、盆栽界に組織化の動きが活発のようでした。1961年に日本水石協会が立ち上がり、第1回日本水石名品展が開催されました。また昭和初期より続いた国風盆栽会が1965年には日本盆栽協会に改組されています。遠くルーツを同じくする盆栽・水石文化がこの半世紀に栄枯盛衰を経験し、今日に至りました。僣越ながら「世界遺産プロジェクト」を機に、両界の強い絆を一層強めあえる関係が構築されることを願います。

函館から帰って、リオ五輪のTV観戦を楽しみましたが、メダル獲得の困難さと、日の丸を背負う選手達の重圧感が強く伝わってきました。攻めて攻め切る日本チームの試合運びに快哉を叫びました。

必ずメダルをとの強い思いの若いオリンピック選手に負けず、盆栽・水石関係者も強く団結し、貴重な伝統文化の保存と発展のために攻め続けなければなりません。

世界遺産プロジェクト、目指すは「金メダル」。果敢に挑戦し、まずは「予選通過」を果たしたいと思います。全国の石友のご支援をお願いします。

（2016年8月・日本チームの活躍を称えながら）



上は現在の大沼公園。この日は残念ながら曇り空で駒ヶ岳は望みませんでしたが、52年ぶりのセンチメンタルジャーニーとなりました。右が紅顔の美青年？だった頃の筆者です。



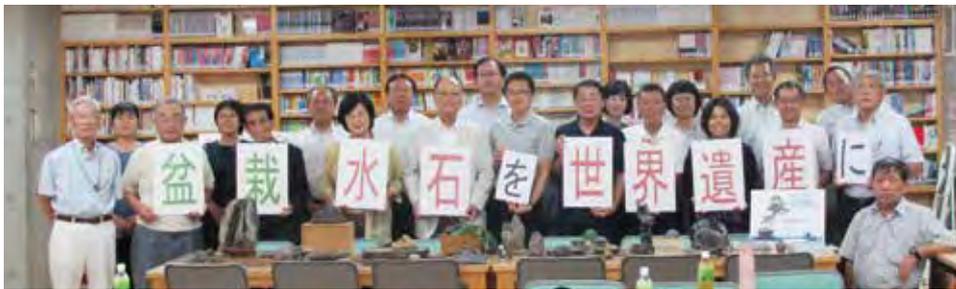
めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界（無形文化）遺産に登録する運動を推進しています

（二社）全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長

西山 巍



上・コイルの会で講演
右・コイルの会の皆さんと

「コイルの会」で水石講座・総論と各論

9月3日（土）夕刻、岡崎市立翔南中学校で「コイルの会」の皆さんに「水石を楽しむ」の演題でお話をさせていただきました。聞きなれない「コイルの会」は三河地区の中学校技術家庭科の先生方の自主研修グループの名称です。会員数80人、1981年から教育活動の改善に取り組まれています。

今から2年前、この会OBの宇野政博氏（79）と知り合いました。氏は1998年に校長を退任後、人権擁護委員ほかを歴任、現在は、豊田腹話術支部長としてボランティア活動もされている名士です。宇野氏のお声かけで、先生方には「聞きなれない」であろう「水石」を語る機会を与えていただきました。

当日は二十余個の蔵石も持参して臨みました。趣味を同じくする仲間内では、話は各論からですが、この日の「素人さん」には「石とは」からのスタートです。「水石」の総論は分かりやすく、「楽しむ」の各論は面白くせねばと、少しばかり頭と気を遣いました。1時間半、20名の皆様に清聴いただき、お世辞半分のお褒めも受け、ホッと会場をあとにしました。教育の重責を担う先生方から一言でも石の話が生徒たちに伝われば、文化と世

界遺産PJへの理解が進むのではとの期待をしたものでした。事前準備にご尽力いただいた安城中部小学校の向井義則教頭先生、当日のお手伝いをお願いした石仲間の落合東一さんと太田賢吾さん、有難うございました。

9月12日にNHKの無形文化遺産特集番組で、浄瑠璃、和食、和紙ほか各分野のリーダー達のひたむきな姿が紹介されました。彼らの文化継承者としての強い当事者意識に感銘を受けました。

国の無形文化財が横滑りでユネスコの無形文化遺産に登録されるケースが多い中、「和食／日本人の伝統的な食文化」はちょっと異色です。その提案書では日本の食文化を幅広くかつ深く分析しています。自然尊重、家族の絆、行事料理、出汁、下ごしらえ。食材から食器に至るまで文化を定義しています。農水省肝いりの活動です。新たに今年は「山・鉢・屋台行事」、再来年には「来訪神／仮面・仮装の神々」がユネスコで審議される予定と聞きます。正式登録が待たれます。

さて我が盆栽・水石は？ 自問自答が必要です。守るべき文化は何なのでしょう。盆栽、水石、それぞれの「各論」から導かれる因数で両文化共通の「総論」を解かなければなりません。自然崇拜、理想世界の追求、縮景、環境、癒し等々、世界遺産候補に手を上げるために文化継承の重要性と必要性を証する説明責任があります。識者による準備委員会組織の発足が望まれます。当事者の皆様方からのご賛同とご支援を、切に期待します。

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

「盆栽 水石文化保存会」
盆栽・水石文化を世界(無
形文化)遺産に登録する
運動を推進しています

(二社)全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長
西山 巍

クズとセイタカアワダチソウ・4万年後への記録

去る秋晴れの一日は、我が藤岡愛石会の今年2回目の探石会でした。会員外の参加者を含め25人が長浜市の姉川古戦場跡・野村橋の袂に集合。写真撮影の後、探石開始、

真黒、梨地、虎石、さざれ石、清流に豊富な石種を楽しみました。この辺りは1570年の合戦地、さらに国道365号線を南東に下れば、1600年天下分け目の関ヶ原です。わずか30年、驚くほどの短期間に織田、豊臣、徳川の英傑たちが激動を駆け抜けました。

最近、河原へのアクセスの難しい河川が多くなったと感じます。堤防の斜面に葛や雑草が伸び、本流にも草木が茂る景色を目にします。この日の姉川も例外ではありませんでした(写真後方が河原)。

上・姉川探石会
左・20周年記念誌

観賞用にと、日本から北米に渡った葛が、現地嫌われ者となってしまいました。繁殖力が強く固有植物を駆逐する勢いで育つ外来種だからです。

一方、北米からのセイタカアワダチソウが日本で同じ理由で悪者扱いされています。可憐な秋の野草2種、それぞれが外地で受難とは興味深いものです。

四百余年前の姉川の戦いでは、浅井の兵も葛に足を取られたかも知れません。

話が変わります。我が藤岡愛石会は今年で結成20年です。前会長の日比谷照夫氏と現副会長の中島光夫氏の尽力で、11月に創立20周年記念誌を発刊することが出来ました。10周年に続き二度目の冊子、会員各位が石への思い入れを綴った文集です。貴重な記録として保存せねばと思っています。

さて、世界遺産PJです。「夢の浮橋」「末の松山」「残雪」他、伝承石として現代に伝わる名石。多くの識者が、それらの由緒因縁を説いています。とりわけ「愛石」に掲載される佐藤観石氏の考察には現地現物の魅力を感じます。数百年前の「記録」の断片から、ジグソーパズルを解くごとく当時を図る、その忍耐力と洞察力に敬服するばかりです。今に生きる我々は、文化継承の仕組作りをし、数百年後の識者と好事者に的確な「記録」を提供せねばなりません。盆栽・水石文化保存会の重要な役目の一つと理解しています。

40年前に飛び立った探査機が、いま太陽系を離れて4万年先の隣人へ地球の「記録」を届けようとしています。このボイジャーに乗った日本の曲「鶴の巣籠り」(山口五郎・尺八演奏)、銀河の彼方で何と響くのでしょうか。

足下の石と盆栽の「記録」は、ほんの数百年先へ運ぶだけです。地球上です。どういう媒体で、どんな「記録」を届けることになるのでしょうか。考えるのは「今」です。



めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界（無
形文化）遺産に登録する
運動を推進しています

（二社）全日本愛石協会副理事長
藤岡愛石会会長
西山 巍

「日本の書道」・プッシュとフェッチ

トヨタ自動車の退職者で構成する「豊寿会」で、恒例の趣味展が開催されました。藤岡愛石会会員の半数が豊寿会にも所属してい

ますので、石展、探石等の行事には相互乗り入れをしています。盆栽チームも加わり、老人グループが協力しPJを推進しています。私はこの直前まで2週間の入院を余儀なくさせられました。肺炎でした。入院生活は冗長で非生産、決して心地よいものではありませんが、iPhoneやiPadの携行で巷との隔絶感は緩和されます。メールのやり取りは勿論、小さな電子機器から得られる情報で安心感を覚えるものでした。

それにしてもパソコン用語と
いうのは、なぜこんなにも理解
困難なのでしょう。最近もま
た、ややこしい言葉を知って
しまいました。「プッシュ」と
「フェッチ」です。メールの受信
方法に関する「符牒」です。サー
バーから受信者に自動送信され
るのがプッシュ、受信者がサー
バーにメールの有無を問い合わせ
るのがフェッチです。フェッチ
は電池の消耗度を減ずる策と
のことですが、情報は瞬時の自
動送受信が当然と思っていた私
には驚きでした。

さて世界遺産です。今、日本の書道が無
形文化遺産への登録を目指して運動を進め
ています。「日本書道ユネスコ登録推進協
会」（事務局：公益財団法人全国書美術振興
会）が発足して2年、全国から1万4千余
の団体署名と、250の個人・団体からは
4千2百万円を超す基金が寄せられていま
す。組織挙げての活動を後盾に、昨年9月
には文化庁への陳情が行われました。組織作
りと全国に展開したネットワーの機動力に
目を見張ります。因みに2009年に「中国
の書道」、2013年に「モンゴルの書道」
が世界遺産登録されています。

我が「盆栽・水石文化保存会」は立ち上げ
から1年になりました。よちよち歩きの脆弱
組織、反省を兼ねた名古屋銘風盆栽展での周
年行事は叶いませんでしたので、世界盆栽大
会終了後に関係者集会を開催すべく段取りを
進めたいと考えています。このプロジェクト
ト、老人独りのボランティアでは到底無理な
話、またトップ外交で解決するものでもあり
ません。当事者の「本気度」と「やる気度」
があらゆる場面で試されます。

新年に当たり、プッシュモードで一同が肩
に力を入れて協力を誓い合い、エキサイティ
ングにこの1年を楽しみたいものです。



トヨタ自動車OB主催の「豊寿会趣味展」に掲げたメッセージ

それにしてもパソコン用語と
いうのは、なぜこんなにも理解
困難なのでしょう。最近もま
た、ややこしい言葉を知って
しまいました。「プッシュ」と
「フェッチ」です。メールの受信
方法に関する「符牒」です。サー
バーから受信者に自動送信され
るのがプッシュ、受信者がサー
バーにメールの有無を問い合わせ
るのがフェッチです。フェッチ
は電池の消耗度を減ずる策と
のことですが、情報は瞬時の自
動送受信が当然と思っていた私
には驚きでした。

さて世界遺産です。今、日本の書道が無
形文化遺産への登録を目指して運動を進め
ています。「日本書道ユネスコ登録推進協
会」（事務局：公益財団法人全国書美術振興
会）が発足して2年、全国から1万4千余
の団体署名と、250の個人・団体からは
4千2百万円を超す基金が寄せられていま
す。組織挙げての活動を後盾に、昨年9月
には文化庁への陳情が行われました。組織作
りと全国に展開したネットワーの機動力に
目を見張ります。因みに2009年に「中国
の書道」、2013年に「モンゴルの書道」
が世界遺産登録されています。

我が「盆栽・水石文化保存会」は立ち上げ
から1年になりました。よちよち歩きの脆弱
組織、反省を兼ねた名古屋銘風盆栽展での周
年行事は叶いませんでしたので、世界盆栽大
会終了後に関係者集会を開催すべく段取りを
進めたいと考えています。このプロジェクト
ト、老人独りのボランティアでは到底無理な
話、またトップ外交で解決するものでもあり
ません。当事者の「本気度」と「やる気度」
があらゆる場面で試されます。

新年に当たり、プッシュモードで一同が肩
に力を入れて協力を誓い合い、エキサイティ
ングにこの1年を楽しみたいものです。

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界（無形文化）遺産に登録する運動を推進しています

インドの石ミルとアーユルヴェーダ

12月、東京・三鷹の「キッチンスタジオペイズリー」を訪ねました。香取薫氏が主宰するインド料理の教室です。氏は日本を代表するインド・スパイス料理研究家で、多数の書籍を出版し、TVやマスコミで活躍中のエネルギーシユな女性です。この日はインドの「石ミル（石臼）を拝見し、スパイス作りを見学しました。昼食には本場のカレーをいただきました。



(上) キッチンスタジオペイズリーのスタッフを交えて記念撮影（真ん中の「を」を持つ女性が香取薫さん）
(下左) 石ミル（石臼）の数々、（下中）料理中の香取薫さん、（下右）この日ご馳走になったインドカレー

インドス文明期に発祥したとされる古代医学「アーユルヴェーダ」が連綿と継承され、現代もお予防医学として、その存在感を増しています。気候や体調を診ながら、香辛料を微妙に調合して作る家庭ごとの「おふくろの味」も、その中で生まれたことを知りました。かの地の主婦達が家族健康の願いを込めて、石ミルでスパイスを挽く台所の日常が目に浮かびます。この日ご馳走になった料理は、寒い季節の特別メニューでした。お心遣い有難うございました。写真撮影や署名活動へのご協力に感謝しつつ帰路につきました。

ユネスコの無形文化遺産は昨年末で366件。その中で「食」に関する案件は18件とそれほど多くありません。2010年に「フランスの美食術」、「メキシコの伝統料理」、「地中海の食事」（沿岸7カ国）が登録されて以来、ほぼ毎年追加されています。2013年には「和食・日本人の伝統的な食文化」が加わり、日本食が改めて世界での認知度を高めたことは衆知のとおりです。ひょっとしてインドでは「カレー料理・アーユルヴェーダの実践」というコンセプトで、すでに申請準備がされているかもしれません。「19件目」への登録が待たれます。香取氏からピリリと「山椒」の効いたお話を伺って、それほどに奥深い食文化だと理解しました。

（二社）全日本愛石協会副理事長

藤岡愛石会会長 西山 巍

最近、素晴らしい冊子が上梓されました。

『愛石』1月号の付録として刊行された、佐藤観石氏による『伝統的水石文化―無形文化遺産登録資料』です。水石文化の適格性検証のための文化論です。片や盆栽に関しては、『日本の盆栽文化を世界無形文化遺産に登録する運動』と題する斎藤晃久氏の提言が1年前の『近代盆栽』誌に連載されました。いずれも格調高く水石と盆栽文化を称え、世界遺産運動の必要性を力強く提唱されています。ルーツを同じくする両文化の共通性を確認しながら、それぞれの独自性を昇華させてきた歴史認識は活動の原点です。その上で「盆栽・水石文化保存会」組織の持続性を高め、目標達成に向けた活動を「めげずに」肅々と「やりぬく」必要があります。世界盆栽大会後の関係者の決起を期待します。

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

〔盆栽 水石文化保存会〕
盆栽・水石文化を世界（無形文化）遺産に登録する運動を推進しています

（二社）全日本愛石協会副理事長

藤岡愛石会会長

西山巍



（上）素朴な土人形、（下右）雛飾り、（下左）足助の町並み

「中馬のおひなさん」・遺産は資源

春まだ浅い季節、愛知県豊田市足助町あすけで「中馬のおひなさん」という雛祭りが開催されました。今年は19回目とのことで、数年ぶりに訪ねましたが、平日にもかかわらず多数の来訪者が古い家並みと各戸に展示された雛飾りを楽しんでいました。とりわけ土雛と土人形の素朴さには、心がなごみました。秋には紅葉でにぎわう香風溪の町です。季節ごとの町おこしのご努力が伝わってきました。

宮本常一著『塩の道』（講談社）は、全国の「塩」を民俗学的に解説した興味深い書籍です。書の中ほどにある「中馬」と「足助塩」に関する記述からは、江戸から明治までの馬と塩で賑わう足助地区の情景が浮かんできます。三河の海岸と信州の山間地の中間に位置するこの地は、物流の要衝地でした。当時、三州街道と呼ばれた現在の国道153号線は、足助から飯田を経由し、「塩」の終着点である長野県塩尻に至ります。「中馬」とは、この街道で物資を運ぶ通し馬のことです。これら往時の「中馬の習俗」が、1977年に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択され、さらに2011年には、足助の町並みが「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されています。

やたら堅苦しい名称の文化財に囲まれているが、ほのぼのとした「中馬のおひなさん」は、時を経て伝統文化に成長していくものと思えました。

さてこの際です。日本の文化財保護と世界遺産について勉強してみました。ユネスコの世界遺産条約は1972年、無形文化遺産保護条約は2003年に採択されています。一方、日本の文化財保護法は1950年に制定され、国宝等の文化財のみでなく、新たに世界で初めて「無形文化財」が保護の対象となりました。こうした日本の先見性ある保護策がユネスコの無形文化遺産条約の成立に貢献したことを知りました。先人の偉業です。

今回の情報収集で、民俗学者の菊池健策氏（元文化庁調査官）と才津祐美子氏（長崎大学准教授）にたどり着き、お二人の講演記録と論文に共感を覚えました。才津氏は『世界遺産と日本の文化遺産』（2013年・日本社会学会誌）の中で世界遺産ブームをクールに分析されています。有形、無形の「遺産」が、社会や地域おこしの「資源」とされているという氏のコメントは、ポジティブに受け止めたと思います。2015年から始まった文化庁の「日本遺産」事業、そのねらいは地域活性化と観光資源開発であると明言しています。まさにクールジャパンの発信です。「四国遍路」や「鶴飼」など、全国37のストーリーが燃えつつあります。衰退の危機感から始まった「盆栽・水石文化」の無形文化遺産プロジェクトは、その活動の途上から「炎上」することを願っています。

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

「盆栽 水石文化保存会」
盆栽・水石文化を世界(無
形文化)遺産に登録する
運動を推進しています

(二社)全日本愛石協会副理事長 西山 巍
藤岡愛石会会長



(上) 五万石展と (下) 銘風展

盆栽展見学・「良い」と「より良い」

岡崎市と名古屋市中で盆栽展を訪ねました。「五万石展」と「銘風展」です。立派な作品を揃えた格式高い催しでした。私は、つい添えの石に目が行ってしまいました。その数は少々少なかったように見受けました。銘風展の主催者のお一人である鬼頭正男氏(日本盆栽協合理事)とは世界遺産PJでご相談させていただいている関係ですが、氏は盆栽文化の衰退を懸念し、真剣に「活性化」を探っておられます。趣味は一代でやむなし、しかし文化は末代まで継承されなければならないの思いを共有しております。水石、盆栽に限らず日本の伝統文化が直面する問題に高齢化や環境変化で片づけてはなりません。何故こうなったのか、どうすれば活性化が図れるのかを関係者一人ひとりが自らの問題と捉えて対応せねばなりません。

本稿のサブタイトル「めげずにやりぬく」は、私の現役時代の職場活性化運動で使ったキャッチフレーズです。10年前、民営化直後の会社で「良い職場づくり」と銘打ち、全社展開を行いました。力で押した場面もありましたが、趣旨を理解したスタッフの頑張りで改善を実感したものでした。退職後も成り行きを見守りましたが、活動は「より良い職場づくり」と名を変えて継続されていきました。そのコンセプト

トの変化が気になったことを思い出します。プロジェクトの出発点での問題意識の強さが、その後の改善の速度と成否を左右します。すでに良い職場だが「より良くしよう」との、やさしさや甘さは改善には不向きです。現下の問題発見の感度と強度が削がれるのではないかと危惧したものでした。

さて、水石・盆栽界活性化のための課題認識は十分でしょうか。

もう一つ、こうした活動には情熱を持ったリーダーの存在が不可欠です。むずかしく、めんどろくさい仕事を「めげずに」、むなし仕事もしらげずに「やりぬく」不屈の指導者を発掘しなければなりません。小林國雄氏(日本水石協合理事長・春花園館長)はこれを「狂人」と呼んでいます。無形文化遺産候補に手を挙げた石と盆栽界には狂人集団が必要なのです。

おりしも世間では、成人年齢の引き下げと、高齢者年齢の引き上げが話題になっていきます。「若い成人」と「若い老人」の出現は、日本の活力復活の兆しではないでしょうか。この「若い老若」が日本文化衰退を憂い、当プロジェクト推進のリーダーとして参画していただければこの上もありません。

彼らの活動を支える環境整備は、盆栽・水石文化保存会の仕事です。世界盆栽大会後は「良い保存会づくり」に邁進したいと思うこの頃です。(PJリーダー募集中。ご一報ください)

めげずにやりぬく

「世界遺産」プロジェクト

「盆栽 水石文化保存会」
盆栽・水石文化を世界（無
形文化）遺産に登録する
運動を推進しています

（二社）全日本愛石協会副理事長

西山 巍

藤岡愛石会会長

「石の心臓」、サウダーデ、わびさび

世界遺産アカデミー殿のブログに、宮澤研究員によるポルトガルの民話とスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラが紹介されました。私は1986年からの3年間、ポルトガル北部の町ポルトに滞在しましたので、このエッ

シーを懐かしく読ませていただきました。ポルトはポルトワインの生産地で、旧市街が世界遺産になっている風光明媚な都市です。滞在中の週末は、石を求めて郊外へと出かけました。それを見た秘書が、「石の心臓（コラソン・デ・ペドラス）を採りに行こう」と誘ってくれました。

ポルトから南へ200^{キロ}の町、ファティマです。オリーブの林の中、木の根近くの石灰岩に貝化石（写真）を見つけました。燕に似た古生



（上）ポルトの旧市街景観

（下）「石の心臓」5×5×2

境の川を渡り、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラに入ります。聖ヤコブの墓所、ここもキリスト教の聖地です。スペイン北部のピレネーから東西800^{キロ}に及ぶサンティアゴへの巡礼道が世界遺産です。ここでも徒歩で聖地を目指す敬虔な人々を目にしました。因みに「熊野古道」を擁する和歌山県と「巡礼道」のガリシア州とが、「道」の縁で姉妹提携をしている由、世界遺産が取り持つ国際親善は良いお話です。

「わび・さび」は、水石や盆栽文化の背景にある美意識のキーワードです。日本人にも難しい言葉、ましてや外国語への翻訳は簡単ではありません。ポルトガルにも、世界で最も翻訳困難であろう単語があります。ご存知「サウダーデ」(Saudade)です。辞書には「なつかしき、やるせない気持ち、郷愁」等ありますが、もっと奥深い感情表現の言葉とされています。ビジネスではタフなポルトガル人も、ひとたびワイン片手に民族歌謡ファドを唄う時には、やさしさと思いやりを感じました。今、彼らを懐かしむこと、それがサウダーデかも知れません。

栄枯盛衰・喜怒哀楽・艱難辛苦、長い体験から生まれた含蓄に富む言葉には興味を尽きません。日葡における両単語、いずれも12世紀頃から書物に登場したと知り、その偶然にも驚かされました。

水石、盆栽も同時代からの伝統文化です。勝手ながら、世界遺産アカデミー殿の無形文化遺産分野への業務拡大と「盆栽・水石文化保存会」へのご支援を切に期待しています。

代の腕足類化石を石燕（せきえん）と呼ぶことは聞いていましたが、なるほど、これを「心臓石」とはよく言ったものです。ファティマは、1917年に聖母マリアが出現したとされる聖地です。膝をつきながら聖堂へと歩む多くの信者の姿に感銘を受けました。

ポルトから北へ200^{キロ}、途中、国